

ALPHONSE

堺 アルフォンス・ミュシャ館[堺市立文化館]
ミュージアムニュース

MUCHA

MUSEUM *News*



隠れた一頁を照らす。

CONTENTS

展示報告(2024年4月-2025年3月)

教育普及活動

講座・トピックス

館外イベント

主な作品修復報告

作品紹介

コラム

VOL. 14

イリュストラシオン ミュシャとアール・ヌーヴォーの挿絵

会期：2024年4月6日(土)～7月28日(日)

華麗なる19世紀末
フランスの挿絵本の
世界



“イリュストラシオン”とはフランス語で「挿絵」を意味し、本展はミュシャの挿絵に注目した展覧会です。ミュシャの挿絵や作品は生涯に250冊以上の書籍や雑誌に掲載されました。彼の画家としてのデビューは挿絵の仕事から始まります。ミュシャはポスター画家としてパリで一世を風靡する前から書籍や雑誌の挿絵を描くことで生計を立て、その後売れっ子の画家になってからも挿絵を描き続けました。その作風はおよそ50年間のミュシャ・スタイルの発展に沿ったものとも言えます。19世紀末は装飾が物語を超えて自立し独自の魅力を持つアール・ヌーヴォーの挿絵が生まれた時代です。本展ではミュシャが挿絵から装丁までを手がけた書籍『トリポリの姫君イルゼ』をはじめ、同時代のアール・ヌーヴォーの美しい挿絵本、さらにミュシャの後半生の大作や関連する挿絵作品をご紹介します、初期から円熟期に至るミュシャ、そしてアール・ヌーヴォーの挿絵の世界をご堪能いただきました。(Y.K.)

本展公式図録(フルカラー18ページ)

ミュシャの挿絵やその下絵、彼のアール・ヌーヴォーの傑作本『トリポリの姫君イルゼ』の図版も多数掲載。また本展書き下ろしコラムも収録しました。



企画展関連イベント

メモ帳づくりワークショップ

日時：5月12日(日)13:00～15:30

講師：大喜多真子
(NPO法人 書物の歴史と保存修復に関する研究会)

ミュシャの挿絵にちなんだメモ帳づくりワークショップ。ミュシャのデザインを表紙に使ったオリジナルのメモ帳をつくりました。また書物の歴史や本の修復についてもお話いただき、本に関する知識と体験の両方を満喫できるワークショップでした。



学芸員によるスライド・トーク

日時：4月21日(日)、6月15日(土)、
7月6日(土)14:00～

展覧会の見どころを豊富な図版とともにスライドでご紹介しました。



ミュシャの挿絵を4つの時代とテーマでご紹介。

第1章 初期の挿絵

ミュシャにとって挿絵は画業の重要な基礎であり、初期から「円環」や「S字カーブ」を特徴とする独自のスタイルを確立していました。資金難の中、挿絵制作によってパリで生計を立て、これらの要素を後のポスターやパネル作品へと発展させました。また、歴史画家を志していた彼は、歴史書の挿絵を通じて技法を学び、1900年パリ万国博覧会の壁画や大作《スラヴ叙事詩》にその経験を活かしました。挿絵はミュシャの創作活動全体を支える重要な位置を占めていたのです。本章では挿絵、そして挿絵とスタイルが共通するポスターやパネル、歴史画を並べて展示し、ミュシャ・スタイルの源流を探りました。



『ズラダ・ブラハ』誌表紙の習作
1890年、素描、鉛筆、紙
堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵

第2章 白い象の伝説

ミュシャはアジアを舞台とした児童書『白い象の伝説』の挿絵を依頼され、持ち前のデッサン力を活かして動物や植物を写実的に表現しました。単色で陰影を効果的に使い、物語の要所をわかりやすく描写して好評を博し、本書はロングセラーとなりました。挿絵には自然と人間の対比が表れ、堂々とした象の姿や自然の偉大さが強調されています。また、円や長方形等を用了構図は後のデザイナーとしての才能の兆しでもあり、ミュシャの初期挿絵として重要な作品です。本章では当館が所蔵するミュシャ肉筆の下絵全20点を一堂に展示し、ミュシャによる挿絵の生の筆遣いを楽しんでいただきました。またポスター画家としても活躍していたミュシャの画業前半生の挿絵を中心にご紹介しました。



『白い象の伝説』第3章(下絵)
1894年、書籍
堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵

第3章 アール・ヌーヴォーの挿絵本

19世紀のヨーロッパでは印刷技術の発展により、挿絵入りの書籍が普及し、豪華版書籍も登場しました。1880年代から1900年にかけてアール・ヌーヴォーの挿絵本が次々と制作され、装飾が物語を超えて独自の魅力を持つようになりました。この流れはミュシャをはじめ、同時代の画家によって表現されました。1897年に出版された物語『トリボリの姫君イルゼ』は、ミュシャが初めて書籍全体のデザインを手がけた作品です。挿絵と装丁に統一感があり、物語の登場人物や場面を象徴するモチーフや装飾が多く使われ、夢幻的な世界観を表現しています。特に、組紐模様や繰り返し登場する象徴的なモチーフが物語に調和し、自然や人物を象徴的に描いた挿絵は、ミュシャの他の作品にも共通する要素を持ちます。またウジェーヌ・グラッセとモーリス・プーテ＝ド＝モンヴェルによるアール・ヌーヴォーの挿絵本もご紹介しました。



『トリボリの姫君イルゼ』(仏語版)
pp.26-27 1897年、書籍
堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵

第4章 『主の祈り』とミュシャの思想

ミュシャはポスター画家として成功しながらもそれに甘んじず、芸術を通じて祖国や人々に貢献することを目指しました。書籍『主の祈り』によって人々に希望をもたらすことに活路を見出したミュシャは、以後本格的に祖国チェコのための作品制作に注力します。そしてスラヴ民族の歴史や独立、平和を称える大連作《スラヴ叙事詩》に取り組みます。アメリカ滞在中には、『主の祈り』と共通の構図を持つ《ハーモニー》に取り組み、広く人類へのメッセージとも読める作品を制作しました。また多くの挿絵制作も並行して行い、生涯を通じて祖国やスラヴ民族への貢献を続けました。本章ではミュシャがプロデュースし、キリストの教えを基に、祈りの言葉、解説、イメージ画の3ページ構成で描いた書籍『主の祈り』をはじめ、大作《ハーモニー》とミュシャの画業後半生の挿絵を中心にご紹介しました。



『主の祈り』(仏語版)p.19
1899年、書籍
堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵

【同時開催】ミュシャとアール・ヌーヴォーの部屋

3F展示室ではミュシャの代名詞である華やかな女性像の装飾パネル(レブリカ)を一堂に展示しました。ミュシャに関する書籍の閲覧、作品の見どころ解説やパーツ遊びが楽しめるデジタルコンテンツを、アンティーク家具があるアール・ヌーヴォー風の空間の中で楽しみいただきました。



アフィショマニ！ミュシャマニ！

会期：2024年8月3日(土)～12月1日(日)



集めて、愛でて、語り合う
19世紀末パリの
ポスター収集熱

シユレ、グラッセ、スタンラン、ボナール、そしてミュシャ。19世紀末のパリの街頭は多色刷りリトグラフ(石版印刷)の発展によって鮮やかなポスターで彩られていました。道行く人々の目を魅了するポスターは、誰もが親しめる大衆の芸術として、新たな価値を持ち始めます。そこに現れたのがポスターを集める愛好家たち。“アフィショマニ”(ポスターマニア)という言葉ができるほどに、個人の芸術趣味へと広がっていきます。さらにアフィショマニの中から「ミュシャを推す」「ミュシャマニ」が現れると、室内を飾ったり手元で楽しむミュシャ作品が登場。グッズ開発の戦略は現代にも通じます。ミュシャマニの心をくすぐったことでしょう。本展は、「収集」という側面から、ポスターが芸術として価値を高めた様相を浮かび上がらせる試みでした。今もなお収集欲を掻き立てられる19世紀末パリのポスター文化に触れながら、ミュシャの魅力、デザイナーとしての手腕を味わい尽くしていただけたのではないのでしょうか。(Y.H.)

企画展関連イベント リトグラフ実験室！

19世紀末パリの印刷技法・リトグラフ(石版印刷)に注目したイベントを開催

子ども向けワークショップ

リトグラフってなあに？
紙平版画をやってみよう！

日時：①8月17日(土) ②8月18日(日)
各日10:30～
講師：稲田大祐(相模女子大学 教授)
稲田恵理子

大人向けワークショップ

プチ石版で
リトグラフ講座

日時：①8月16日(金) ②8月17日(土)
③8月18日(日) ④9月28日(土)
各日13:30～
講師：稲田大祐(相模女子大学 教授)
稲田恵理子

リトグラフプレス機でミュシャを刷ってみよう！

日時：8月4日(日)・8月16日(金)・8月23日(金)・8月31日(土)・9月8日(日)・
9月16日(月・祝)・9月29日(日)・10月6日(日)・10月12日(土)・10月
26日(土)・11月10日(日)・11月24日(日)・11月30日(土)
各日11:00～または14:00～

学芸員による手引き式リトグラフプレス機の実演と、希望者は一人一枚の刷り体験を実施。自ら刷ることの楽しさ、そして当時の印刷工の技術の高さと苦勞も味わっていただきました！



稲田氏の親しみやすくわかりやすいレクチャーで、子どもから大人まで、リトグラフ(平版画)のしぐみを楽しみ体験していただきました！



展示構成 本展はポスター黄金期のアフィショマニ(ポスターマニア)の実態、ポスター作家の中でもミュシャに魅了されたミュシャマニ(ミュシャマニア)*、という2つの視点で展示を構成しました。

*「アフィショマニ」は1856年にパリで作られた造語、「ミュシャマニ」は今回の企画展で当館が作った造語です。

01 集めたい アートになったポスターを

アフィショマニの邸宅に見立てた展示室に、アフィショマニ向けに販売された縮小版のポスター集『ポスターの巨匠たち』1年分を一挙に公開しました。ミュシャだけではなく19世紀末のポスターの多彩さをご覧ください。ポスターが収集の対象となり、批評家たちをも魅了し、芸術として昇華された背景を知っていただけたのではないのでしょうか。

PICK UP! 体験コーナー

19世紀末のパリでは、人気のポスターはよく壁からはがされて盗まれていたということで、マグネット式のポスターでこっそり盗む体験コーナーを設置。



『ポスターの巨匠たち』1895～1896年

1895年から1900年の5年間、毎月4セットずつ発売され、97人の芸術家によるポスターを集めることができたのです。

02 集めたい 日常をうるおす ミュシャ・スタイルを

ポスターデビューで一気にアフィショマニの心をつかむと、名実ともにパリのトップデザイナーとして活躍していくミュシャのデザイン業の軌跡をご紹介します。

イメージを売るミュシャ・スタイル



一導かれる商品の世界

ミュシャは女神のような女性像を使って商品のイメージを伝えています。19世紀末のパリの街路に見立てた空間でミュシャの商業ポスターと当時の商品を合わせて展覧。“ウォール・ショッピング”をお楽しみいただきました。

ポスターから広がるミュシャマニ・アイテム



一生活を美しくデザインする

ポスター人気から室内でミュシャを楽しみたいミュシャマニが現れ、制作されたのが「装飾パネル」。《四季：1896年》を始まりとする装飾パネル、そこから転用された装飾鏡や絵皿、カレンダーを紹介。現代にも通じるグッズ展開としても興味を持っていただけたのではないのでしょうか。

アール・ヌーヴォーの芸術家たち



一ミュシャの先達、 ミュシャが与えた影響

流麗な曲線、植物モチーフが特徴の装飾様式は、19世紀末の芸術の潮流「アール・ヌーヴォー」として、ミュシャに限らず、多くの芸術家の作品とも呼応していました。同時代のアール・ヌーヴォーと評された作家の作品をご紹介します。

アンリ・ブリヴァ・リヴモン
《アブサン・ロベット》
1896年 リトグラフ、紙
OGATAコレクション蔵

ルイス・リード
《ジーン：『レスタンプ・モデルヌ』誌より》
1897年頃 リトグラフ、紙
堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵

身に着けたい私だけのミュシャ・スタイル



一ジュエリーに宿る芸術性

部屋に飾るだけにとどまらず、ミュシャマニの需要は身に着けるジュエリーへと広がっていきます。展示室をミュシャが手がけた宝飾家ジョルジュ・フーケのショップに見立て、ジュエリーデザインをご紹介します。



展示会の内容を凝縮したガイドシートを無料配布しました。

リトグラフについては同時開催

「ミュシャ Labo #5 特集！リトグラフ」 P.07へ▶

ミュシャ館の舞台裏

会期：2024年12月7日(土)～2025年4月9日(水)



徹底解剖!?
美術館の仕事
ミュージアム
ミュシャの専門

堺 アルフォンス・ミュシャ館は、アール・ヌーヴォーを代表する芸術家アルフォンス・ミュシャ(1860-1939)の初期から晩年にかけての豊富なコレクションを所蔵する、日本でも珍しいミュシャに特化した美術館です。当館では、年に3回の企画展を開催し、毎回異なるテーマや作品を通じて、新たな視点からミュシャの魅力をご紹介します。

美術館(博物館)の役割は、作品の収集や保存、調査研究、展示、そして教育普及など多岐にわたりますが、これらの活動が日々どのように行われているかは、あまり知られていません。本展では「収集」「保存修復」「教育」「キュレーション」の4つのテーマに焦点を当て、当館のコレクションを紹介するとともに、当館を例に、普段は目にふれることのない美術館の裏側の仕事に迫りました。

初めてご来館された方にも、何度も足を運んでいただいている方にも、この展覧会を通じて改めて当館の活動を知っていただき、当館および美術館の未来を考える機会になりました。(学芸員3人の共同企画)

企画展関連イベント

トーク・イベント 学芸員に聞いてみよう

日時：12月15日(日) 14:00～
登壇者：堺アルフォンス・ミュシャ館学芸員



来館者から寄せられたミュシャ館についての質問に、学芸員たちがトークイベントを通じてお答えしました。参加者からはあまり知られていない学芸員の仕事や美術館の裏側を知ることのできる良い機会だったという声を多数いただきました。

ミュシャ・コレクションの 収集秘話

日時：1月11日(土) 14:00～
講師：尾形寿行(OGATAコレクション所蔵者)



ミュシャ館のコレクションの前身であるドイ・コレクションの収集に携わった尾形寿行氏に収集の舞台裏についてお話いただきました。《ラ・ナチュール》などの主要作品の入手秘話や土居氏とミュシャの息子ジリさんとの思い出など大変貴重なお話を聞くことができました。

体験コーナー

キュレーション体験 -ミュシャ展をつくってみよう!



16分の1のミニチュア・ミュシャ館の模型の中に200点の作品を使って、自分だけのミュシャ展をつくる体験コーナー。学芸員になったつもりで展覧会づくりを体験していただきました。

参加型コーナー

教えて! みんなの「推し」ポスター



過去10年の当館の展覧会ポスターからお気に入りのデザインに投票してもらったコーナー。開幕日から4,000票を超える投票をいただきました。今後の展覧会ポスターづくりの参考にいたします。

当館の歴史やコレクション、多岐にわたる当館の活動について、「収集」「保存修復」「教育」「キュレーション」の4つのテーマで展示しました。

COLLECTION
— 収集

美術館のコレクションは誰かが集めた作品が元になっています。これらを元に各美術館が収集の方針を決め、コレクションを保存・拡充することが一般的であり、コレクションの「収集」は美術館の中心的な役割です。当館はミュシャを中心とした約500点の作品を所蔵しており、その前身は土居君雄氏が収集した「ドイ・コレクション」です。土居氏の没後、このコレクションは堺市に寄贈され(一部購入)、当館で所蔵管理しています。所蔵作品には、ポスターやパネルのほか、素描、下絵、油彩、書籍、彫刻、ジュエリーなどが含まれ、多彩で貴重なコレクションです。本章では土居氏のコレクションの収集経緯や当館の歴史、さらに当館所蔵の多彩なミュシャ・コレクションをご覧いただきました。(Y.K.)



CONSERVATION
— 保存修復

美術館が持つ大きな役割のひとつは、所蔵された作品や資料を限りなく未来へ伝えていくために、適切な環境で保護し、保存することです。館によって環境はさまざまですが、ミュシャ作品を未来へつなぐための修復方法、また作品が現状以上に劣化しないように技法によって照明の光の強さを変えるなど、当館ならではの収蔵庫や展示室内の環境、展示の工夫をご紹介します。

当館では作品を休ませるために、レプリカ(複製画)を展示することがあります。現代の複製技術と本物と並べての展示では、みなさん真剣な表情で見比べていました。(Y.H.)



EDUCATION
— 教育

当館は堺市内で唯一の美術館として、日々ミュシャ作品を通じて美術作品鑑賞の楽しさを伝えるように努めています。展示会もそのひとつですが、美術館そのものに興味を持ってもらうことや、ミュシャ作品との出会いの提供、来館のきっかけづくりも大切です。そこで当館が行っている学校からの団体来館や学芸員による出前授業を体験していただける展示空間をつくりました。展示の高さや解説も子どもたちに合わせた内容にしています。あえて作品名を隠して考えてもらったり、描かれた人物と同じポーズをしてもらったり、ひとつの作品をじっくり見る面白さにもふれてもらえたのではないのでしょうか。(Y.H.)



CURATION
— キュレーション

ミュシャ館では、繊細な紙の作品を保護しつつ、多くの人にその魅力を伝えるため、約4ヶ月ごとにほぼ全ての展示作品を入れ替えた企画展を開催しています。学芸員は保存の制約を踏まえながら多様な視点でミュシャの魅力を紹介するキュレーションを行います。本章ではこのキュレーションの成果を過去10年間にわたる当館の展示会ポスターの展示等を通じて振り返りました。またキュレーションの一例として『装飾資料集』の展示、さらに、キュレーションを体験できる模型展示コーナーも設け、来館者に展示会づくりを楽しんでいただきました。(M.T.)



テーマ展示

ミュシャ・Labo #05「特集！リトグラフ」

当館に寄せられる最も多い質問のひとつが「リトグラフについて詳しく知りたい」です。ポスター、装飾パネル、書籍の挿絵、ミュシャ作品の広まりと人気は、リトグラフ印刷の発展なくしては語れません。

リトグラフとは、ギリシャ語で、リト(石)に描かれたグラフ(図)という意味です。日本では石版印刷と呼ばれます。水と油の反作用を利用して印刷する技法です。彫ったり、削ったり、穴を開けることなく、版の上に描いたほぼそのままを印刷できることが大きな特徴で、現代のオフセット印刷の原理の元にもなっています。

コピー機もプリンターもない19世紀末、印刷はリトグラフによる手作業で行われていました。作家が描いた版下絵を転写し、製版し、刷るという分業で、ひとつの表現を作り上げていたのです。(Y.H.)



リトグラフ印刷機の寄贈

2022年6月、1台の手引き式リトグラフ印刷機と石版の寄贈を受けました。寄贈者は大阪府立今宮工科高等学校です。印刷機は昭和40年代から印刷の授業で実習に使用されてきたものですが、演習のデジタル化など種々の事情があり廃棄せざるを得ない状況となっていました。廃棄を惜しむ先生から当館へお声かけがあり、当財団で寄贈を受け、現在当館で常設展示しています。



印刷機には「小森印刷機械製作所」の文字、現在海外にもシェアを広げる印刷機器メーカー小森コーポレーションの前身です。寄贈された印刷機について、同社の方に尋ねたところ、大正末から昭和初期に製造されていたもので、現存数も少ないとのこと。貴重な史料です。

リトグラフが主役の展示の実現

これまでも解説パネルなどで、リトグラフの仕組みをご紹介していましたが、印刷機と石版の寄贈時から温め続けた「リトグラフ技法」をテーマにした展示が実現しました。

19世紀末のポスター人気の立役者である、ジュール・シェレやアンリ・ド・トゥールーズ=ロートレックの作品も紹介。ミュシャとともにそれぞれが目指したリトグラフ表現に注目しました。

さらにリトグラフ研究者・稲田大祐氏の協力によって、道具や描画方法のサンプルを展示、加えて製版、刷りの工程を映像にして上映*。より実践的な展示になりました。



技法に注目しながらの鑑賞の面白さをお届けできたのではないのでしょうか。

*：「リトグラフの版の作り方・刷り方」は
ミュシャ館公式YouTube「ミュシャ館チャンネル」で公開中です。

《罌粟と女性》色分解大実験

展示ではミュシャの作品が何色何版で刷られているのかを探るため、《罌粟と女性》を題材に色分解を試みました。作品を観察し、使われている色の数と刷り順を検討。今回の解釈では、15版15色という結論が得られ、繊細な色調整を行いながら刷り重ねられていたことがわかりました。当時はこれらが手作業によって数千枚単位で刷られていたことで、印刷工の技術の高さに驚く声も多数いただきました。



制作・協力：稲田大祐(相模女子大学 教授)



《罌粟と女性》1898年
リトグラフ、紙
堺 アルフォンソ・ミュシャ館(堺市)蔵

ミュシャ館のお仕事の舞台裏

「ミュシャ館の舞台裏」展でご紹介したミュシャ館や学芸員の仕事についてダイジェスト版Q&Aでご紹介します。



Q1 ミュシャ館には学芸員が何人いるの？

A. 現在は3人です。2000年に現在の地で開館以来、10人以上の学芸員が在籍してきました。これまで多様な視点の展示を実現してきましたが、残念ながら学芸員は3~5年という短任期であり、長期的な視点が必要な作品の管理等、対応が難しい課題が多々あります。特に小規模な美術館での作品の情報・管理は、データ化できない学芸員の経験や記憶も重要です。このような難しい状況の中でも、できる限りのノウハウを次世代の学芸員に引き継ぎ、100年、1000年先にも作品を未来に伝え続けていきたいです。

Q2 作品の解説やパネルの文章はどうやって誰が書くの？

A. 学芸員が書きます。美術館は博物館法に基づき所蔵作品に関する専門的調査を行う役割を担っており、学芸員の重要な仕事のひとつとして調査研究があります。作品の背景や所有者の遍歴を明らかにし整理・保存・公開することで、未来の研究に貢献します。また学芸員は専門分野を活かして作品の魅力を伝え、美術館の個性を形成します。調査研究は新たな価値観を生み出し、展覧会の基盤となりますが、学芸員の業務が多岐にわたる中で、調査研究に割く時間の確保が課題となっています。

Q3 1回の展覧会に費用はどれだけかかるの？



A. 展覧会には多くの人が関わるので想像以上に費用がかかります。予算制約の中で運営が行われますが、スケールが大きくなるほど費用が増え、優先順位の見直しや取捨選択が必要です。学芸員やスタッフが外部の手を借りずに作業を担うこともあります。助成金の申請も試みますが、不確実です。限られた予算で最適な資金配分を模索する努力が、展示室の裏側で続けられています。

<主な費用と依頼先>

- 広報物やパネル類のデザイン費(グラフィックデザイナー)
- 広報物の印刷費(印刷会社)
- 美術作品の展示作業費(美術展示の専門スタッフ)
- 美術作品の輸送・梱包費(美術輸送専門ドライバー、美術梱包の専門スタッフ)
- 資料の借用費(他の美術館、画廊、コレクターなど)
*公立館同士の場合は無償貸出が通例
- 展示室内の造作費(施工会社)

*この他にも図録の制作印刷費、広報宣伝費やパネルの翻訳料、協力者に対する謝礼金、額、什器、照明等の資材費など、さまざまな費用がかかります。

Q4 出品作品はどうやって決めるの？

A. 当館は約500点の所蔵作品を活用し、年3回の企画展を開催しています。当館には常設展示がなく、保存管理上、展示品を頻繁に入れ替える必要があり、担当学芸員はひとつの企画展につき、約70~100点を選定します。一度展示した作品は一定期間保管が必要で、各企画展の担当学芸員間での調整が重要です。また、華やかな目玉作品に限られる中、修復や貸出中の作品も考慮しながら出品作品の選定を行います。他所からの作品借用では輸送費がかさむため、装飾の簡略化など予算調整も求められますが、日々試行錯誤を重ね、理想の展示を目指しています。

*当館公式YouTube「ミュシャ館チャンネル」ではこれまでの企画展の展示風景もご覧いただけます。

Q5 ミュシャ館のコレクションは増えているの？

A. 残念ながら新しく収集するのは難しい状況です。堺市のミュシャコレクションは約500点を誇りますが、企画展を多様なテーマで展開するには所蔵品が不足しており、特定の作品や種類が欠落した作品の補てんが課題です。本来、美術館には収集機能が求められますが、真贋判定や予算確保、購入後の運用など高いハードルがあり、当館の新規収集は现阶段では現実的ではありません。しかし、これまで個人や団体からの寄贈によってコレクションが拡充された例もあります。



《秋：四季》(1900年) 《冬：四季》(1900年)
*いずれも堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵

秋と冬は当館で所蔵していますが、シリーズの春と夏は所蔵していません。

Q6 コレクションの活用ってどんなことをしているの？

A. 地域の方々やアーティストとのコラボレーションを通じて、ミュシャの作品世界をさらに広げています。近年の連携実績をご紹介します。

- 大阪刑務所：ミュシャの絵画を堺の手織り技で絨毯制作(2021-25年度)
- リトグラフ研究者：ミュシャのリトグラフの制作方法について実験(2024年度)
- ピアニスト：ミュシャにゆかりのある音楽の再現演奏(2023年度)
- 人形作家：ミュシャ作品をイメージした人形の制作(2023年度)
- 大阪モード学園：ミュシャをイメージしたファッション・メイクの表現(2022年度)
- 関西大学総合情報学部有志ゼミ：現代のテクノロジーでコレクションを活用・表現(継続)



《ロレンザッチオの楽譜：『イラストレーション』誌》1897年

*その他、地元のレストランや洋菓子店との連携、地元就労継続支援B型事業所や森林組合など多くの方々と連携しています。

教育普及活動

ミュシャ館ではここ数年、教育普及活動の一環として学校施設へのアプローチを積極的に行ってきました。2024年度は堺市内と大阪府下の小学校を中心に、出前授業や団体来館の受け入れを行いました。

出前授業

タペストリーを用いた鑑賞、ミュシャのモチーフを使ったデザインカードづくりを通じてミュシャ作品に親しんでもらいました。本年度は近年の出前授業での経験を踏まえ、低学年、中学年、高学年ごとに授業プログラムを用意し、それをもとに各学校の要望とも調整しながら授業を行いました。



教員研修

堺市内の小学校、中学校、支援学校の先生方による図工部会の研修会が当館で行われました。当館の成り立ちやコレクションの特徴についてお話をさせていただき、開催中の企画展をこどもたちへの解説の方法も交えながらご覧いただきました。先生方との意見交換も行い、今後当館が学校施設へのアプローチや活動を行う際に参考にしていきたいと思っております。

団体来館

本年度は昨年度に出前授業を行った学校が多数来館してくださいました。1年経っていてもミュシャや作品について覚えてくれている子どもも多く、鑑賞後のふりかえりでは本物を見ることができた喜びや、出前授業との感じ方の違いを伝えてくれました。美術館を身近に思ってもらえるべく、このように継続的な来館につなげていけたらと思います。



展示での教育普及活動の紹介

企画展「ミュシャ館の舞台裏」では、当館の活動のひとつとして、学校への普及活動を紹介しました。展示を通じて出前授業や団体来館での作品鑑賞を体験できるコーナーを作り、こどもたちへの問いかけを軸にした作品解説は、大人の方も新鮮な気持ちでご覧いただけたのではないのでしょうか。

02 **大きな作品!**
どんな絵が自由に想像してみましょう。

🔍 鑑賞のヒント1
真ん中の人は誰だろう?

🔍 鑑賞のヒント2
たくさんの人が描かれているね。
絵の中の右にいる人と左にいる人の顔を観察してみよう。

🔍 鑑賞のヒント3
どんな色が使われているかな?

🔍 鑑賞のヒント4
いったいどんな場面を描いたのかな?

*企画展「ミュシャ館の舞台裏」の内容についてはpp.5-6をご覧ください。

「Mu-CUBE」用ガイドシートとアートカード作成

昨年度制作した学校利用向けの鑑賞教育ツール「Mu-CUBE」用に、ガイドシートと使われている作品のアートカードを作成しました。ガイドシートは先生たちがすぐ使えるようにわかりやすい遊び方を伝えています。アートカードでは、より作品に親しんでもらえるようにこどもたちに向けたクイズ形式の作品解説にしました。



教育機関等での美術鑑賞をご検討のみなさま



ミュシャ館は、こどもたちの美術鑑賞を応援しています。学校からの団体来館、出前授業やワークショップ他、図工・美術に関わる先生の研修会などお気軽にご相談ください。展示準備などの繁忙期を除きご対応させていただきます。

講座

ミュシャ館では鑑賞をより楽しんでいただくために、展示室内での解説ツアーや講演会等を開催しています。



京都産業大学 「アルフォンス・ミュシャの魅力と 展示会のつくりかた」

日時：7月17日(水)
場所：京都産業大学
講師：高原茉莉奈

京都産業大学文学部1年生を対象とした授業「文学概論」の講師として登壇しました。ミュシャの79年の生涯について、当館のコレクションを通じて紹介するとともに、学生の皆さんの進路の一つとして想定される学芸員の仕事について、当館の展示会づくりを例にお話ししました。



堺ロータリークラブ 講話 「多彩な芸術家 アルフォンス・ミュシャの魅力 —珠玉のコレクションから」

日時：10月24日(木)12:30-13:30
場所：アゴーラリーゼンシエ大阪堺3階
ガーデンコート
講師：原田悠里

伝統と歴史のある堺ロータリークラブの定例会にて、講話に登壇しました。ミュシャの作品の魅力と画業人生を当館のコレクションを通じてご紹介。また堺のロータリークラブにちなみと謝野晶子との関連にもふれながらミュシャの日本美術への影響についてもお伝えしました。



学芸員による解説ツアー

ほぼ毎月実施

各企画展の担当学芸員が展示室を巡りながら作品解説を行いました。展示のコンセプトや解説パネルに書ききれなかった作品背景も交えながら出品作品の魅力についてお話ししました。



TOPICS

寄稿 『版画芸術』No.204 2024年夏号 阿部出版 特集「ベル・エポックの華 世紀末パリのグラフィックス」

19世紀末から20世紀初頭にかけてパリで興った華やかな文化「ベル・エポック」。この時代はリトグラフ(石版印刷)の技術進歩によって制作可能になった色鮮やかなポスターをはじめとした“グラフィック”作品が積極的に用いられる時代の嚆矢でした。2024年はこの時代を取り上げた美術展が全国各地で多く開催されました。本特集ではベル・エポックを代表する二人の画家であるロートレックとミュシャを中心に、リトグラフの始まりの時代を築いた数多くの作家による「グラフィックアート」の魅力が紹介されました。



- ・「ミュシャ 世紀末のマルチ・アーティスト」(pp.32-50)
ポスター《ジスモンダ》や装飾パネル《四芸術》シリーズ等、ミュシャ館を代表するリトグラフ主要作品の数々が紹介されました。
- ・「19世紀末のマルチ・アーティスト」(p.51)
ミュシャという他に類を見ないマルチ・アーティストの足跡とその影響について、当館学芸員川口裕加子がインタビューに答えました。

ミュージアム干支コレクションアワード 2025已

美術情報サイト「インターネットミュージアム」が毎年開催している「ミュージアム干支コレクションアワード」は、干支にちなんだ日本全国のミュージアムが所蔵する作品の中からお気に入りの作品に投票する企画です。巳年の2025年は「蛇」が入っている作品がエントリーの条件。ミュシャ館からは、ミュシャが描いた女優サラ・ベルナールの演劇ポスター《メディア》が元になったジュエリー作品《蛇のブレスレットと指輪》でエントリーしました。ゴールドやダイヤの輝きが眩しく、オパールで表現された蛇の鱗は虹色にきらめいています。しなやかな蛇の胴体を表す曲線や蛇の頭の周りの水しぶきのようなデザインは、自然の中の造形からデザインするミュシャの装飾美が発揮されています。残念ながら上位入賞はなりませんでした。199票とたくさんの温かい応援メッセージをいただきました。応援してくださった皆様ありがとうございました！



アルフォンス・ミュシャ
《蛇のブレスレットと指輪》1899年
金、エナメル、オパール、ダイヤモンド
堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵



作品貸出

山梨県立美術館、栃木県立美術館、パナソニック汐留美術館への貸出

「ベル・エポックー美しき時代」展
 山梨県立美術館 2024年4月20日(土)～6月16日(日)
 栃木県立美術館 2024年7月13日(土)～9月8日(日)
 パナソニック汐留美術館 2024年10月5日(土)～12月15日(日)

19世紀末から1914年頃までのパリが芸術的にもっとも華やいだ時代「ベル・エポック」。ベル・エポック期から1930年代に至る時代の美術、工芸、舞台、音楽、文学、モード、科学といったさまざまなジャンルで花開いた文化のありようを重層的に紹介する展覧会。

当館からはミュシャとゆかりが深く、ベル・エポック期に活躍した女優サラ・ベルナルをモデルにしたポスター《トスカ》と《サラ・ベルナル》を貸出しました。巡回によって国内各地の皆様にご覧いただける機会となりました。また2025年4月からは岡山県立美術館に巡回する予定です。



展示風景



左：アルフォンス・ミュシャ《サラ・ベルナル》
1896年 堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵
 右：ルネ・ラリック、アルフォンス・ミュシャ(デザイン)
《舞台用冠「ユリ」(エドモン・ロスタン作『遠国の姫君』にてサラ・ベルナルが着用)》
1895年頃 箱根ラリック美術館蔵



写真提供：パナソニック汐留美術館
 写真撮影：Nacása & Partners

府中市美術館への貸出

「アルフォンス・ミュシャ ふたつの世界」展
 2024年9月21日(土)～12月1日(日)

ミュシャは世紀末パリを彩るポスターの数々を生んだデザイナー、そして、壮大なテーマを重厚な油彩で描き出した画家と、二つの顔を持つ芸術家だと捉えられています。しかし、その両方に貫かれているのは、どんな素材を扱っても「ミュシャ風」にする圧倒的な造形力です。版画、油彩画に、貴重な下絵なども交えながら、ミュシャ最大の魅力である造形力を紐解いた展覧会。

当館からは《クオ・ヴァディス》や《ハーモニー》といった大型油彩作品をはじめ、下絵やデッサン等、当館ならではのミュシャ・コレクション全24点を貸出しました。デザイナー、油彩画家として、ミュシャの多面的な魅力と一貫する造形力を、多彩なミュシャ作品を通じて楽しめる展覧会となりました。

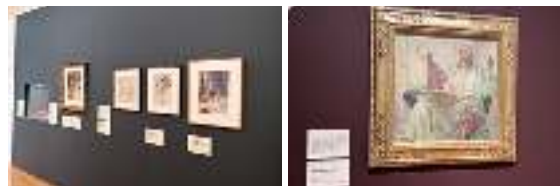


展示風景



左：アルフォンス・ミュシャ《クオ・ヴァディス》
1903-04年 堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵
 右：アルフォンス・ミュシャ《ハーモニー》
1908年 堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵

展覧会入口



アルフォンス・ミュシャ《目を閉じた少女》1920年頃
 堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵

📄 主な作品修復報告

ミュシャ館では修復専門家と連携しながら所蔵作品のコンディションを常に把握し、優先度の高い作品から順に修復を行っています。ここでは、修復を行った作品の一部をその内容とともにご紹介します。



アルフォンス・ミュシャ
ウェイヴァリー自転車

1897年 リトグラフ、紙
843×1084mm
堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵

2023年度は28点のポスターや装飾パネル、挿絵、下絵等、紙に描かれた作品が山領絵画修復工房にて修復されました。ポスター《ウェイヴァリー自転車》は、額装がおそらく数十年前の作品購入時の状態のままでした。作品を固定していた紙は酸性で、裏打(補強するために作品の裏側に貼られた紙)に用いられた接着剤が酸化するなど、保存の観点から見ると適切な状態ではありませんでした。また画面には全面に、白色の硬い細かな粒の付着が無数にあり、作品の縁には傷みが見られました。今回は洗浄して白い粒や酸性の素材を取り除き、作品に悪い影響を与えない素材に交換し、作品の形を整えてマットを新調する等の修復が行われました。

修復前(部分)



修復後(部分)



修復前(部分)

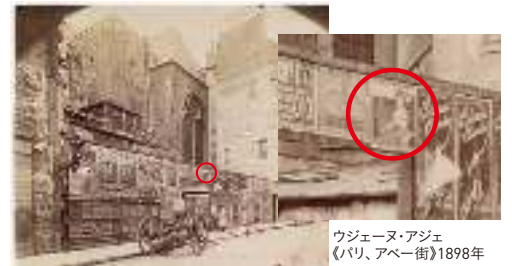


修復後(部分)



作品本来の姿

ミュシャが制作した《ウェイヴァリー自転車》のポスターが、バリの壁に貼られていた当時の写真が残されています。高さ3mを超す壁にはもちろんガラスやアクリルなど絵を保護するものではありません。雨風の中でも吹き曝します。しかしひとたび美術館に所蔵されると、未来へつなぐために大切に守られます。額装され展示された作品が本来はどんな場所にあったのかを想像しつつ、より良い状態で保つための学芸員の仕事や修復の仕事にもご注目ください。



ウジェーヌ・アジェ
(パリ、アペー街)1898年

📖 購入資料紹介

ミュシャが挿絵を描いた書籍を資料として特別に3点購入しました。その挿絵と内容の一部についてご紹介します。

アンドレ・エマニュエル・エミール・バルマンティエ
『歴史イラスト集中世編』
(Album Historique, Le Moyen Age)
1897年、28×22cm

歴史上のさまざまなものを文章ではなく、イラストで知ることができる資料集のような書籍シリーズ。ミュシャが描いているのは中世編。中世のシンボルや、アイテム、衣装についてもビジュアルでわかる画期的な資料で、知識階層のみならず幅広い人の興味を引いたことでしょう。ミュシャの描いた伝説や神話画のような荘厳な歴史画は、後の《スラヴ叙事詩》にも通ずるところがありそうです。



ヘンリー・ド・ブリセイ著
『ロランの冒険』
(L'Aventure de Roland, Librairie d'éducation de la jeunesse)
1896年、28×22cm

フランス語で「労働者」を意味する週刊新聞『ルヴリエ』に掲載されていた1814年ナポレオン戦争に関する歴史小説の書籍版です。ナポレオン時代に流行した古代ギリシャ風のシュミーズドレスの優雅さ、軽やかさの表現が見事です。(左図)後のミュシャのポスターに見られる女神像の衣装のたっぶりとした薄い衣の源泉はこの挿絵にあるのかもしれませんが。ミュシャの描いたナポレオンの貴重な挿絵(右図)もあります。



ジョルジュ・ブライス著
『漂流船探検家』
(Les Chasseurs d'Épaves)
1898年、27×19cm

週刊新聞『ラ・レビュー・マメ』で連載されていた冒険小説。優雅な女神を描くミュシャのイメージとは違い、物語の中心人物であるくたびれた雰囲気男性たちの挿絵がほとんどです。主人公レミ・シファードーは、友人らと共にスカベンジャー号に乗船中、難破に巻き込まれながらもニューヨークへたどり着きます。表紙には主人公の友人ホルゲが文書をしたためる様子が描かれています。ミュシャは後にフランスからアメリカへと旅立ちますが、偶然にも本作の旅路と重なっています。





作品介绍

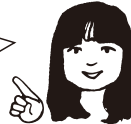
1918—1928：独立10周年

このポスターの文字情報は、画面下部に金色の1918⇄1928の年号のみである。当時のチェコスロヴァキア人にとって独立10周年ポスターと理解するには年号だけで十分であった。

手前に配置された精悍な顔つきの少女はチェコスロヴァキアの擬人像で、左からシレジア(鷲)、スロヴァキア(十字架)、ボヘミア(獅子)、モラヴィア(市松模様の鷲)、ルテニア(熊)と共和国を構成する5つの地域の紋章が描かれたヘアバンドを身に着けている。手前の少女を際立たせるような暗い青色の女性はスラヴ菩提樹の冠をかぶった

スラヴ民族の寓意像、スラヴィアである。スラヴィアの青、少女の衣装の赤、白はチェコの国旗の配色である。スラヴィアが差し出したチェコスロヴァキアの独立10周年を祝福する金色の光に包まれた花輪は、鑑賞者の視線を自然とチェコスロヴァキアの顔に引き寄せ、特別な存在であることを表現している。(N. F.)

少女のまなざしが
独立国の誇りを
感じさせます。



アルフォンス・ミュシャ
《1918—1928：独立10周年》1928年
リトグラフ、紙、1222×853mm



アルフォンス・ミュシャ
《カッサン・フィス印刷所》
1896年
リトグラフ、紙
1768×803mmと
1799×724mm 2点所蔵

カッサン・フィス印刷所

アーチには「豪華な芸術的かつ商業的プリント」の宣伝文句。本作はフランス・トゥールーズにある印刷会社「カッサン・フィス」のために制作されたポスターである。当時の印刷は手作業によるリトグラフ(石版印刷)のため、手動のプレス機が描かれている。ハンドルに手をかける印刷工の肉体からは、相当な力仕事だったことが窺える。月桂樹の葉を着けた芸術の女神に、美しい刷りの秘密を打ち明けているのだろうか。

内側のアーチの目は、印刷機から刷り上がりのもので向けられており、印刷工の目、また印刷物を待ち望む購買者の目とも受け取れる。

レンガを思わせるモザイク装飾、印刷工の肌の

不自然な青みは、レンガ建築で名を馳せ、青い染料でルネサンス期に繁栄した、トゥールーズの街を象徴しているようだ。

ミュシャは1897年頃からシャンプノワ印刷会社と専属契約を結び、ほぼ全ての仕事はシャンプノワ社を通すことになる。本作はシャンプノワ社契約前の貴重なポスター作品である。(Y. H.)

刷り上がっている
ミュシャ・スタイルの
肖像画も気になります！



百合の中の聖母〈下絵〉

1895年以降、流行のデザイナーとしてパリで大成功を収めたが、満足しなかったミュシャは、1899年にキリストの教えを独自の解釈で視覚化した書籍『主の祈り』を制作した。この頃から商業デザイナーから本格的な油彩画家への転身を図り始める。ちょうどその頃にエルサレムに建設予定だった修道院の聖マリア礼拝堂の装飾を依頼され、高尚かつ永続性のある作品の制作をミュシャは快諾する。この依頼の一部として礼拝堂のために描かれたのが《百合の中の聖母》である。

1903年に描かれた習作とされる作品(図1)では、《ポエジー》(図2)のように、天上の存在に向かって祈りを捧げる人物、というこれまでにミュシャが何度か描いてきた宗教的テーマの作品と同様の構図だった。しかし下絵(本作)では少女と彼女には見えない聖母、さらに2人を背後から天使ケルビム*が見守る構図に変更された。後にミュシャ

がよく描くことになる人間の目には見えない導きが表現されたのである。

画面左下にはミュシャのパリ時代の恋人ベルト・ラランドに対する親愛の言葉が刻まれている。本作が描かれた前年にミュシャは後に妻となるマルシュカと出会う。本作は宗教的でありながらも、ミュシャとベルトの出会いと別れの記念的な作品でもあるかもしれない。(Y. K.)



図1《百合の中の聖母の習作》
1903年 バステル、紙
1250×1100mm



図2《ポエジー》
1894年 油彩、カンヴァス
645×450mm



アルフォンス・ミュシャ《百合の中の聖母(下絵)》
1904年 油彩、カンヴァス
741×558mm

聖母のやさしい表情と
神秘的な雰囲気注目です。



* 知識をつかさどる天使

「部屋で楽しむ演劇
—19世紀末の新聞付録—

19世紀末パリのアパートマンに住まうブルジョワ階級の人々の間には、娯楽があふれていた。産業革命を経て発達した印刷技術のおかげで街には色とりどりのポスターが貼られ、またパリに点在する劇場で続々上演される芝居は、それらを心待ちにする彼らの目も耳も楽しませた。

そして彼らは街に出ずとも、こうした娯楽をインドアで楽しむことさえできた。評判の高いポスターを手頃なサイズにして毎月発売した『ポスターの巨匠たち』は、マニア垂涎のコレクションアイテムだったし、「装飾パネル」に描かれたミュシャの女性像は、彼らの部屋に彩りと気品をもたらした。そして当時の雑誌や新聞には、プレミア公演や話題作に対する、批評家たちの賛否両論



《ロレンザッチオ》1897年 リトグラフ、紙
堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵

の文字が踊り、その模様を彼らに伝えた。しかし当然テレビもない時代、部屋に居ながら劇場の「空気」を感じるためには、文字の羅列だけでは物足りない。その視覚的なイメージは、モノクロ写真や挿絵画家たちが描写したイラストが伝えた。ブルジョワ層向けの挿絵入り新聞『イリュストラシオン』(1843-1944)では、紙面だけでなくその表紙も、時事的な情景の代わりに演劇のワンシー



ミュシャのアトリエでオルガンを弾くゴーギャン
1893年頃

ンが飾ることもあった。そして『イリュストラシオン』の購読者の毎月のお楽しみが、付録としてついてくるピアノ譜である。

かつて、貴族しか触れる機会のなかったピアノも、すでにブルジョワ家庭を中心に親しまれていた。アップライトピアノや、それよりも安価なりードオルガンが、部屋で過ごす時間に華を添えていたのだ。ミュシャが有名となる前の1893年にオルガン



《ロレンザッチオの楽譜：『イリュストラシオン』誌》1897年 紙に印刷
堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵

を購入してアトリエに置き、友人たちとともに弾いたというエピソードも、その普及ぶりを裏づける。

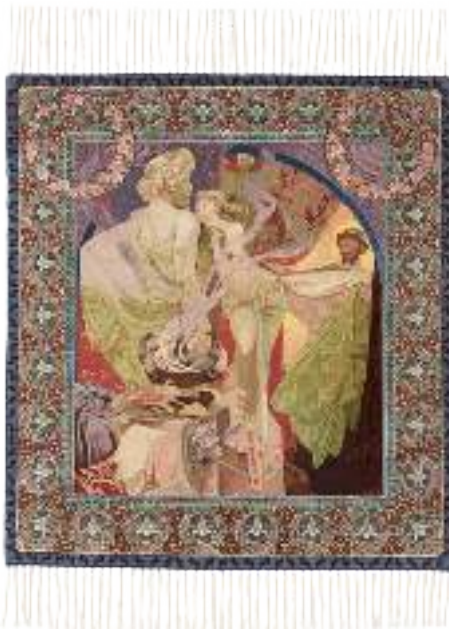
当時のブルジョワは新聞に掲載された楽譜のおかげで、自宅に居ながら話題の音楽、たとえば新作演劇の劇中曲にふれることができた。サラ・ベルナールが初の男役として主演し、ミュシャがポスターを手がけた「ロレンザッチオ」の劇中曲も、管弦楽曲からピアノ譜へと姿を変え、『イリュストラシオン』の付録となっている。^{*1}弾くとたちまち優雅なメロディが部屋を劇場へと変容させ、ドアを出て、観劇に足を運びたくなる。こうした宣伝目的も含んでいたのだろう。

さて、当時の演劇の付随音楽は、あくまで舞台の「背景」であり、その閉幕とともに姿を消すことが多い。こうした中で新聞のピアノ譜は、当時の空気の「再現」をいまに叶える貴重な資料である。

当館では、当時の新聞のピアノ譜を「堺市新進アーティストバンク」の登録ピアニストに、演奏してもらい取り組みも行ってきた。上述した「ロレンザッチオ」の演奏収録(2023年)に続き、2025年1月にはミュシャの「謎の絵画」にゆかりのある舞台「クオ・ヴァディス」の演奏の収録をフェニーチェ堺で終えたばかり——というのは“裏側”での話ではあるが、展示室でぜひ当時の舞台の空気を体感していただきたい。(M.T.)

*1: "AIR DE BALLET", *L'illustration*, Supplément musical au No. 2806, December 5, 1896.

トピック



《堺織通「クオ・ヴァディス」》
2022-24年 羊毛、毛綿

クラウドファンディングプロジェクト

「ミュシャ×堺織通」 さかいだんつう

堺 アルフォンス・ミュシャ館では2021年度より、当館が所蔵する大型油彩画《クオ・ヴァディス》を原画に、堺の伝統技術「堺織通」でタペストリーを織り上げるプロジェクトを実施しています。資金はクラウドファンディングで募り、製織は技術を伝承する大阪刑務所で行われました。約2年10か月にわたる製織の末、ついに2024年10月、完成を迎えることができました。いよいよ特別展「ミュシャ 謎の絵画」(2025年4月20日(日)–8月17日(日))で初公開いたします。



特別展「ミュシャ 謎の絵画」
ページはこちら

[表紙作品]

アルフォンス・ミュシャ 《民衆美術協会》1897年 リトグラフ、紙
堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市)蔵

執筆・編集 川口裕加子(Y.K.)、藤本奈緒(N.F.)、原田悠里(Y.H.)、高原茉莉奈(M.T.)
発行 公益財団法人堺市文化振興財団 堺 アルフォンス・ミュシャ館
デザイン・制作・印刷 株式会社大伸社
発行日 2025年4月1日

堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市立文化館)

開館時間 9時30分–17時15分(入館は16時30分まで)
休館日 月曜日(休日や休日の間の場合開館、翌平日休館)、
休日の翌日(翌日が土・日の場合は開館)、年末年始、展示替期間
観覧料 詳しくは公式ウェブサイトをご参照ください。
アクセス JR阪和線堺市駅下車徒歩約3分
JR快速にて・大阪駅から約25分・天王寺駅から約10分
和歌山駅から約60分・関西国際空港から約40分



<https://mucha.sakai-bunshin.com>

590-0014
大阪府堺市堺区田出井町1-2-200 ヘルマージュ堺武番館
TEL 072-222-5533 FAX 072-222-6833

